

り変化する。これをシナップスの可塑性という。代表的なものを年代順に並べ、解説した。

一、一九七三年に海馬で見いだされた「長期増殖型シナップス」は、外から信号が頻回くると通りがよくなり、「見た、聞いた」とかいう情報をとどめるのに働くものと考えられる。

二、一九八〇年に小脳においてその機序が確定されたもので、小脳の「長期抑圧型シナップス」と云われるもので、プルキニエ細胞に平行線維と登上線維から同時に刺激が入ると平行線維の信号がストップしてしまうものである。小脳のなかではたらいいた間違った配線を切つて、よい配線をのこしているものと想像される。

三、一九八五年、塚原が、脊髄に入つてくる神経線維を一部切つて変性させると、近くの無傷の線維が芽を出してシナップスを作ることが中脳の赤核細胞で起きることを発見した。ネコの前肢の屈曲筋と伸張筋を支配する神経をつなぎ替えると、最初ネコはとまどうが、一週間後には大脳皮質から赤核細胞へのシナップス入力に発芽が起こり、ネコは普通に歩けるようになる。

最近ホルモンと記憶、とくにエストロゲンの作用が注目されている。

他方、物理学者によつて「場の量子論による記憶の解釈」がなされている。記憶とは外界からの刺激や、それに対する意識の印象も含めた内的刺激も、最終的に、細胞骨格や細胞膜の中に作られる大きな電気双極子の形に変形された後、そ

の近くの水の電気双極子の凝集体として安定的に維持される。これが記憶の形成過程に他ならない。

脳神経学者と量子脳理論学者の共同研究により、記憶のメカニズムの解明が待たれる。

#### 参考文献

治部真理・保江邦夫『脳と心の量子論』

高橋 康・治部真理『添削形式による場の量子論』

(平成十一年九月例会)

#### ペスト残影シリーズ 十

#### ケルンに「ペスト残影」を求めて その二

滝 上 正

ペストの第一波パンデミー(ユスチアヌスのペスト)のときは、ケルンはペストを免れた。第二波は十四世紀から十七世紀まで三百年以上続いた。それは十四世紀中葉の一三四九年の黒死病をもつて始まり、今年はそれから数えて六五〇年を経過したことになる。十四世紀にはケルンは黒死病を含めて七波、十五世紀には十波、十六世紀には十波、十七世紀には八波以上にわたりペストに襲われた。この中一六六五〜六七〇年のペストは、ケルンでも黒死病と並んで、凄惨を極めた。

この間ケルンで発刊されたペスト書が若干あり、それらを紹介した。

中世のケルンの街は他のヨーロッパの諸都市と同様、大変不潔であった。その最大原因は豚であって、豚対策に当局は頭を痛めた。さらにペスト対策として当局は市民衛生、検問、ペストハウスなどをとりあげたので、それらを紹介したい。

一六六八年十二月二十七日に漸くケルンは公式にペスト終息宣言をしたのである。

(平成十一年九月)

## 女性の病の社会史

野末悦子

### 1、はじめに

今日は日本医史学会にお招きを頂き、講演をさせて頂くことを心から感謝申し上げます。会長の杉田先生から、お話がございました時、歴史の知識の乏しい私にはとても無理ですと申し上げたのですが、杉田先生のお言葉に背くわけにもいかず、お引き受けしてしまいました。

その後、杉田先生からは立派な、ご本をお貸し下され、それが、この富士川游著『日本医学史』<sup>①</sup>です。この他に文献と<sup>②</sup>③<sup>④</sup>⑤<sup>⑥</sup>しましては、夫の父(矢数道明)の所蔵する本と、私の家にあつた本などを参考にしまして、にわか勉強をさせて頂くこと

になりました。

その結果、どうも、どの本を読んでも、出典はほとんど同じものらしく、同じようなことが書かれていることに気がつきました。また、太古より、朝廷や大臣のような高貴な方々の歴史は残っているものの、その当時の庶民がどんなだったのだろうかというのは、大分後世にならないとわからないということがわかりました。でも、せっかくの機会を頂き、滅多に読むことのない本を読むという貴重な体験をさせて頂いたので、少く、少し、これらの本に書かれてあつたことを中心にお話をさせて頂きます。

### 2、神代

文字のなかった時代のことは、当然のことながら記録がないので、不明となっているのは止むを得ないのですが、『古事記』や『日本書紀』によれば、イザナギ、イザナミの命のまぐわいから日本の国が誕生し、これは生殖を意味するので、最古の医療は産婦人科ということになるのでしょうか。コノハナサクヤ姫が諸々の神を作られた後、最後に火の神を生んで火に焼かれて死んだとあるが、これは産褥熱ではなかったかという説もあるそうです。また、このお産の時には産室を作ったとされ、最後の彦火々出見命(ヒコホホデミノミコト)が後に皇位を継承しているので、後に誕生したものを長とするという考え方(双生児の場合)と通ずるのではないかという説もあるとのこと、また、豊玉姫の産室を海浜に作った故事にならっている地方もあり、産室で産後の褥婦を暖めるため